

2 型糖尿病と安定虚血性心疾患の合併患者の心臓血管リスク予測に 心筋トロポニン T 値が有用

心筋トロポニン T 値は、急性冠症候群患者において、緊急血行再建が有効となる患者を同定するために用いられている。本研究では、安定虚血性心疾患患者においても、心筋トロポニン値を用いて心臓血管イベントのリスクが高い患者を同定し、迅速な冠血行再建の効果が得られることが可能であるとの仮説を立て、その検証を行った。

対象は「2 型糖尿病におけるバイパス血管形成血行再建の検討 (BARI2D)」に登録された患者とした。2 型糖尿病と安定虚血性心疾患を有し、試験開始時に高感度アッセイによる心筋トロポニン T 値測定を受けた 2,285 例が対象となった。トロポニン T 値と複合転帰 (心臓血管による死亡、心筋梗塞、脳卒中) の関連性について調べ、その後、迅速血行再建術群にランダムに割り付けた場合、複合転帰の発生率が低下するかについて、トロポニン T 値の異常値群 (14ng/L 以上) と正常値群 (14ng/L 未満) で比較した。その結果、5 年複合転帰発生率は、トロポニン T 値異常群は 27.1%、正常群は 12.9% であった。心臓血管リスク因子、糖尿病の重症度、心電図異常、冠動脈の解剖学的所見で補正したところ、トロポニン T 値異常群の複合転帰発生ハザード比は 1.85 ($p < 0.001$) と有意に高かった。また、トロポニン T 値異常群においては、迅速血行再建術を受けた場合、薬物療法単独の場合と比較して複合転帰発生率に有意差はみられなかった。

したがって、心筋トロポニン T 値は、2 型糖尿病と安定虚血性心疾患の合併患者において、心臓血管系が原因の死亡、心筋梗塞、脳卒中の独立した予測因子であることが示された。また、迅速血行再建術で効果が得られるのは、トロポニン T 値 14ng/L 未満の場合であることが示唆された。

出典 : New England Journal of Medicine. 2015; 373(7): 610-620